

【1】

四月下旬の夕刻。

真選組屯所の衛門の前では、一台の黒塗りの公用車がエンジンを噴かしていた。

その車につかつかと歩み寄った一番隊隊長・沖田総悟は、運転席の窓ガラスを手の甲でトントンと叩いた。

スーッと音もなく、窓ガラスが半分ほど開いた。

「近藤さん、降りてくださいませ。俺が行きませえ」

車内には、真選組幹部の制服をきっちりと着こんだ近藤勲と、土方十四郎の二人がいた。

運転席で口をへの字に結んでいる近藤は、無言で沖田を見上げた。

「どきなせえ。そこは俺の席でさあ」

留まることも、降りることも決めかねた近藤は、『石』という呪符を貼られたように無然とした表情で固まっている。

沖田は強引に近藤を運転席から降ろした。

「さあ、どいたどいた。あんたは屯所で待っててください」

「…総悟っ」

何か言いたくて。

何か言わなくてはいけなくて。

わなわなと震える唇を開いて年下の部下の名を口にしたはずなのに、近藤は言葉を続けることができなかった。

そんな近藤の胸の内が見えるように見える沖田は、少しでも安心させてやりたいと柄にもなにくりと笑った。

「すぐに帰ってきますよ。近藤さんは、屯所にいてくださいませ。じゃないと、みんなが不安になりますよ——ねえ、土方さん」

「ああ」

助手席に座っている土方も、薄っすらと笑いながら頷いた。

「大丈夫だよ、近藤さん。とりあえず、今日は帰ってこられるだろ。うまい酒とマヨでも用意しといてくれよな」

「…わかった。わかったよ、トシ。——総悟、トシのこと頼んだぞ」

「へいへい。まかしてください。それじゃ、行ってきまーす」

いつも通り、間延びした気だるい挨拶をすると、沖田はアクセルを踏み込んだ。

真選組の屯所から離れ、最初の角を曲がると、土方の空気が突如とげとげしくなった。もう近藤は見えていない。チッと忌々しそうに舌打ちをして、沖田に怒鳴った。

「何でテメーがついてくんだよ！」

「何言ってますか。土方さんが光の速度で落ちて行くんだ。俺

が特等席で見ないで、誰が見るんです？」

「けっ！ 趣味の悪い野郎だよ、テメーは！」

土方は助手席の窓ガラスを開けると、眉間に皺を寄せて煙草に火をつけた。真選組を禁煙にしたのは沖田だが、沖田は土方の喫煙をとがめなかった。

「…褒め言葉ですねい」

人を食ったような笑みを浮かべて、沖田はそうとだけ言った。

「……………」

「……………」

かぶき町を抜ける辺りまで、車内は無言だった。

土方は煙草を吸い続けていた。灰皿には吸殻が山になっている。それなりの速度で走る車の助手席で土方が燻らせた煙は、風に叩かれて瞬殺される。匂いのある白煙は粉々になって春の夕闇に紛れ、立ち上った事実などすぐになくなる。土方はまだ半分も吸っていない煙草を口から離し、吸殻の山にぐりぐりと押し付け、すぐに新しい煙草を手に取り火をつけようとした。しかし、土方愛用のマヨライターは、ガスが切れたようで、カチッカチツと音をさせるだけで火がつかなかった。

「クソッ！」

苛立った土方はマヨライターを窓の外に投げ捨てた。ライターは民家の石塀にぶつかり、道路に転がった。それを目の端でとらえながらも、沖田が嫌味を言うことはなかった。

大通りと交差する長い赤信号が青にかわったところで、アクセルを踏んで正面を見つめたまま沖田が口を開いた。

「本当に行くんですか？」

「……………」

手持ち無沙汰のように、煙草の箱を掌の中で揉むようにぐしゃぐしゃと潰していた土方が、ふん、と鼻を鳴らして答えた。

「何を今さら」

尖った声を上げる土方に、前を向いたままできるだけゆっくりと沖田が言った。

「やめるなら、今が最後のチャンスですよ。会う前なら、執着心も少ないでしょう。あんたが逃げて破談になれば、向こうだってさっさと忘れてくれると思いますよ。真選組にも、大したお咎めはないでしょう。——けど、会っちゃえばそうはいかねえ。あんたみてえな可愛げのねえ憎々しい面は、ある種の変態ジジイにとっちゃご馳走だ。あんたを御所望するような悪趣味なジジイは、粘着質なドSって相場は決まってるあ。会っちゃえば、地獄がはじまりますぜ」

「…やめろ、気分が萎える。もう決めたことだ、テメーは黙ってる」
土方は、まるで他人事のように面倒くさそうに答えた。

——その瞬間。

沖田の瞳孔が、カッと開いた。

沖田は荒っぽくハンドルを切って車を路肩に寄せると、抑えがたい激情のままにブレーキを踏み込んだ。キキーツと悲鳴を上げながら、タイヤが停止した。

「おい、総悟っ！」

非難の眼差しを沖田に向けた土方は、沖田と目が合うやいなや、ゾクッと身が竦みあがった。まるで、夜叉の面でもつけたような鬼気迫る表情で、殺気としか呼べない凄まじい気迫を放っている。

「時間がねえ。まどろっこしいのは無しだ。土方さん、はっきり言いますよ。真選組を辞めて、このまま旦那と逃げなせえ」

沖田はポケットから分厚い封筒を取り出して、土方に投げつけた。封筒の口から、万札がはらりと数枚落ちた。

「昨日の今日の話だ。なんの準備もねえだろうが、金さえあれば一つでもどうにかなるだろう。追っ手がかけられる可能性が高えが、旦那がついてりや問題ねえ。こっちは、俺が何とかしませえ。だから、一刻も早く——」

「何だよ、総悟。副長の座が今すぐ欲しいのか？」土方は沖田の言葉を遮って、せせら笑った。「そんなに慌てなくても、あと数日すりゃあテメーのものになるだろうが。そこまでがつつくんじやねえよ」

ガシッ！

沖田は強烈な意思を持って、土方の制服の胸倉に掴みかかった。土方の襟を掴む沖田の指先は、力の入りすぎで小刻みに震えている。鞭で叱咤するような鋭い声で、沖田は土方の目を見据えて真剣に怒鳴りつけた。

「土方さん、しっかりしなせえ！ 今しっかりしなきゃ、一生後悔することになりますよ！ あんたは、何にもわかつちやねえんだ！ あんた、旦那のことが好きなんですよ！？ 好きで好きで仕方ないんですよ！？ あんた、このままじゃ、一生旦那に会えなくなるかもしれないですよ！ 大事な人に会えなくなるってことがどういうことか、あんたは何にもわかつちやいねえんだ！」

「……………」

まるで他人事のように切り離すことで表面上の平静を保っていた土方の心の湖を、沖田がバシャバシャと荒らして波を立てた。

真剣な怒りを双眸に滾らす沖田の背後に、ミツバの姿が見える気がした。

土方は真一文字に結んでいた唇を、ほろりと解いた。

そして。

どれほど近藤に詰問されても、笑みさえ浮かべて隠し通した嘘のメッキを剥がして、誰にも告げることなく手折って捨てるつもりで

いた本心を沖田に見せた。

「……好きだよ。銀時のことが好きだ。今でも好きだ。決まってる。離れたくねえよ」

万事屋はどうするんだ！ 万事屋のことが好きなんだろ！？——と、自分の恋路を案じてくれる近藤に、土方は答えた。——最近、うまく行ってねえんだ。どうせ別れるつもりでいたから、丁度いい機会だよ、と。

近藤のために。みんなのために。己の誇りのために。

一切の躊躇も見せず、大切な仲間を罪悪感で締め上げぬよう、侍らしく深く静かに地獄に墮ちようと思っていたのに。

——誰も得しねえことを、暴いたのはお前だぜ、総悟。

静かな水面の下が、穏やかに美しく澄んでいるなんて誰が決めたのだらう。

ひとたび水面がざわめけば。

污泥が舞い上がり、ぐつぐつと煮え滾り、真っ暗な渦を巻くのが感情という湖だ。

土方の声に、底なしの闇が絡みついて震えた。

「……銀時以外に抱かれるなんて、考えたこともねえ。銀時にもう抱いてもらえねえってことも、考えたことねえ。想像つかねえ。——けど！」

胸倉を掴まれたまま、土方も沖田の胸倉を掴み返した。

ギリギリと食い縛る歯が、感情を堰き止める力を失くすと。

慟哭のように、断末魔のように。

土方が叫んだ。

「けど、どうしようもねえじゃねえか！ 政略結婚なんて、今も昔もよくあることだ！ 泣いて逃げ出すようなもんじゃねえだろうが！ 相手の魅戸四圍（みとよづく）には先の副将軍だ！ 隠居した今でも幕府に絶大な影響力を持っている！ 裏で天導衆と繋がってるのもあいつだ！ あいつがその気になれば、真選組を取り潰すなんて本当にわけねえことなんだよ！ 逆らえるわけねえだろうが！ …江戸を守るために、真選組を守るために、今まで俺達がどれほどの部下に命を差し出させてきたと思ってんだ！ 副長のこの俺が、テメーの身一つを守るために、真選組を殺せるわけねえだろうが！ 分かれよ、バカ！」

心臓に負担なほどドクドクと脈打つ鼓動が小槌となり、命と同義語な明るい全てを殺すための刃を鍛える。その刃は土方の喉を突き破って飛び出し、沖田に突き刺さった。瑞々しい鮮血があたり一面に飛び散ったような、凄惨な絶望の姿である。

土方は沖田の胸倉を離し、助手席に座りなおした。

「…銀時には、ちゃんと言う。本当のことを言うよ。あいつなら、わかってくれると思うから。——おい、総悟。時間がねえ。さっさ

と車を出せ。そんでもうしゃべるな。頼むから」

沖田の視線を避けるようにそっぽを向くと、土方は押し殺すような声でそう言った。

もちろん、納得している話じゃない。

必死で納得させている話なんだ。

やり切れない思いを正論で塗り固め、自分自身に厳しく言い聞かせている。気を抜くとバラバラに解けてしまいそうな決意を、どうにかこうにか理性と責任感という紐で束ねて、針山の上をよたよたと担いでいるんだ。

飛びつきたくなくなるような。救いのような。

ありがたい提案をしないでくれ。

じゃないと。

気が狂う。

「……………」

栗毛の少年の瞳には、いくつもの言葉と感情が出たり入ったりと駆け巡ったけれど。

選んだのは沈黙だった。

土方の願い通り、沖田は一言も口を利かず目的地へと車を走らせた。

【2】

江戸の北東にある鼓門山(こもんざん)の山中には、とある屋敷に行くためだけに舗装された私道がある。その屋敷こそが、先の副將軍・魅戸四圍公の大豪邸である。

「遅かったじゃないか、土方君」

「……誠に申し訳ございません」

魅戸の大豪邸に到着した時には、約束の十九時を少し過ぎていた。土方と沖田は玄関で刀を取られ、広い座敷に通された。侍らしい無駄のない美しい所作で畳みに掌をついて恭しく頭を下げたが、土方の表情には困惑という文字が張り付いていた。

——品定めをしたい。

そう言われて呼びつけられたこの部屋には、年老いて隠居した魅戸の他に、土方も名を知る現役の高級幕臣の老人が、計十人ほどいたのである。宴を催しているようで、豪華な食事と酒がそれぞれの膳の上に乗っている。

魅戸は土方の困惑している視線に気づき、でっぴりと太った腹を揺らして、くくくつ、と愉快そうに笑った。豚の角煮を食べたばかりの唇が、てらてらと光っている。

「この方々は、わしの大切な友人たちじゃ。わし同様、悪趣味な御仁たちでな、新妻となる君の初調教をどうしても見学したいと言うので同席させてもらうよ」

「…え？ …はつ？」

聞こえなかったわけじゃない。信じられなくて、土方は聞き返した。脳味噌がその単語を受けつけなかったと言ってもいい。

土方の驚愕の表情を見て、老人達は顔を見合わせてにやにやとした。

魅戸はにたりと下卑た笑みを浮かべ、直属の家来に命じた。

「ほらほら、お客様をこれ以上待たせては興が冷める。助太郎、角次郎、早く余興の準備をせんか」

「はっ」

助太郎、角次郎と呼ばれた二人の家来は、土方の目の前に立ち、その腕を掴んだ。

「おい、立て」

「…な、何する気だ！」

異様な雰囲気、土方は警戒して男たちを睨みつけた。

抵抗を見せる土方に、魅戸が上座から命じる。

「土方君、従いなさい」

「……………」

土方に拒否権はない。土方が仕方なく従う素振りを見せると、男

たちは土方の両脇を抱えて歩き出した。この広い座敷の上座には板張りの舞台が設けられていて、土方はそこに連行された。

「！」

舞台に連れて行かれた土方は、そこでまたしても無言のまま驚愕した。

その舞台の中央には短い鎖が肩幅間隔で二つ設置されていて、その鎖の先には鉄の輪が繋がっている。どう見ても、人の足を拘束するための足錠である。

「へへへへへ、大人しく繋がれてもらうぜ、副長さん」

「…や、やめろ！ 何する気だよ！」

驚いている土方の足首に、二人の男は足錠をかけようとした。

土方は予想だにせぬ展開におののいて男達を突き飛ばそうとしたが、横から何人もの男がわらわらと出てきて、土方の両足首に足錠をかけ、手首にも力ずくで手錠をかけた。もしも、土方が本気で抗えば、十数人の男達くらい吹き飛ばせたかもしれないが、魅戸に逆らえぬ土方が、本来の力など発揮できるはずもなかった。男達は手錠のチェーンに縄を通した。

「…！」

手錠に繋がれた縄を恐る恐る目線でなぞって、土方は上を仰ぎ見た。そして、初めて気がついた。天井には滑車があり、自分を拘束している手錠に通された縄は、その滑車へと繋がっていた。

(…な、何が始まるんだよ！ 初調教って、本当にそういう意味なのか！？)

最後の意地と見栄で、ポーカーフェイスたらんとしたが、顔は青ざめて強張り、こめかみから冷や汗が流れ落ちた。

拘束された土方の前に、魅戸がリモコンを片手に近づいてきた。

「ふはは、これで天下の真選組鬼の副長も、捕えられた哀れな性奴隷じゃな」

魅戸は、リモコンのボタンを押した。

(…う、うわあっ！)

思わず漏れそうになる叫び声を、寸でのところで飲み込んだ。

カタ、カタ、カタ、カタ…。

魅戸がボタンを押すと、滑車が不気味な音を上げて回り、手錠に繋がっている縄をゆっくりと引き上げた。手錠を嵌められた手首が、顔の前を上へ上へと通過していくのを目で追うしかない時間は、生きた心地がしなかった。腕が頭の上でピンと伸びても、魅戸は滑車を巻き上げることをやめなかった。徐々に腫が浮き、食い込み防止のついていないステンレス製の手錠に皮膚が食い込んで血が滲んだ。爪先だけが辛うじて床についている状態まで吊るし上げられたところで、滑車は動きを止めた。

魅戸が下卑た笑みを浮かべながら鼻先まで近づいてきた。

(…やめろ！ 来んな！ あっちいけよ！)

刀などなくても殴り殺せるだろう老人を前にして、土方は思わず

後ずさった。無論、手錠と足枷で拘束されているのだから、殺すことも逃げることも不可能だ。それでも土方は爪先を滑稽にひょこひょここと動かして、鎖の長さいっぱいまで逃げた。生理的な拒絶反応である。無理な姿勢に、爪先から太腿にかけて激しく痙攣する。

魅戸を取り巻く老人たちは、愉悅の表情で酒を酌み交わしながら笑っている。

「くっくっく。真選組副長さんのこんな姿が見られるなんてねえ。さすがご隠居様ですなあ」

「さあさあ、早くその制服をひん剥いて、丸裸にしていましょいうよ。ご隠居様の性玩具になるためせつせと鍛え上げた肉体美を、早く我らにも拝ませてくださいませ」

それを聞いた魅戸は、卑猥な妙案が浮かびべろりと舌なめずりをした。

「いや、全裸はやめよう。——助太郎、下だけ脱がしなさい。破るんじゃないぞ。足首まで下げるんじや」

「はっ」助太郎と呼ばれた男は、畏まって返事をする、土方のズボンに手をかけ、ベルトをカチャカチャとはずしにかかった。

未だ状況を受け止められず、思考回路がショートして土方は固まった。

ジーッ、と前部のファスナーが得体の知れない男の指に下ろされた時、いよいよ血相を変えて土方が暴れだした。

「やめろ！ テメー、触んじやねえよ！」

——ガチャ！ ガチャガチャガチャ！

手の肉など、削ぎ落ちてもいいと思った。

土方は身を振り、繋がれた手錠から手を引き抜こうと体重をかけて暴れだした。手首が血だらけになるほどの必死な抵抗も空しく、真選組の制服ズボンと下着が見知らぬ男の手でストーンと足首まで下げられた。

老人達からやんやと喝采が起きる。

「これは、またまた！」

「さすがは、ご隠居様！ 実に卑猥な姿ですなあ」

「…う、うわああああ！」

手も足も拘束された土方は、自らの姿を見下ろし、手負いの獣のように咆哮を上げた。必死に抗って乱れた幹部服の上着のすぐ下に、黒い茂みと性器が剥き出しになっている。

土方の誇りそのものと言っても過言ではない真選組幹部服を着たまま、颯られるために股間を丸出しにされた光景は、もはや視覚的なレイプであった。

なにがなんだかわからなくなって。

土方は錯乱したように叫んだ。

「うああああ！ やめろ！ うわああああ！」

一生慰みものにされ股を開かされることは覚悟していたけれど、ここまで酷く身も心も蹂躪されるとは思っていなかった。

魅戸は、髪を振り乱して暴れる土方の背後にまわり、人差し指を観客に見せて立てると、その指先で土方の引き締まった尻肉と腿の付け根を、ツーツとなぞった。

「…ひいあっ！」

土方の尻肉が跳ね上がり、鎖がいつそう大きな音を立てた。

逃げることなどできるわけもない哀れな尻を、魅戸は感触を確かめるように両の掌でさわさわと撫でながら言った。

「ふははは、土方君、怖いかね。ここからが今日の余興のクライマックスじゃ。まずは、念入りに身体検査をしてやろう」

「…ひあ！ ま、まさか！ や、やめろ！ やめてくれ！」

土方の尻穴に、ナイフのように魅戸の指が突き立てられた。

土方は、反射的に尻穴を絞って入れさせまいと抵抗しながら懇願した。

「…うう、お願いです、こんなこと人前でやめてください！ …こんなこと、こんなこと、部下の目の前でだけは！ ——うわああ、総悟、出てけ！ 見るな！ 見るなああああ！」

あまりに羞恥な状況に。

呼吸がうまくできない。

老人たちの悪趣味な余興の一環として、見世物にされて犯されるどころなど、仲間には見られなくなかった。蜘蛛の巣にかかった虫のように、土方が死に物狂いで暴れていると、

「土方君、この屋敷の支配者はわしじゃ。何人たりとて、わしの許可なく、この場を離れることは許さん！ 君は、部下の目の前でわしの性奴隷に墮ちるんじゃよ！ あっはっはっはっは！」

「うがあっ！」

土方の尻に、魅戸が一本鞭を振るった。

身構えていなかった痛みに、土方の口からは無防備な悲鳴が飛び出した。

「いい声で鳴くではないか。こらこら、そんなにわしの指をきつく啞えてはいかんぞ。奥に進めぬではないか」

「…ああ！ やめろ！ やめろおお！」

ふにふに、と。

土方の恐怖を煽るように、拒絶に堅く閉じた蕾を、魅戸は揉みこむようにつついた。

「ああああ！ …やめてください！ やめてください、お願いします！」

恐怖を搾り取られた土方の声は、甲高く切羽詰っている。

それを情けないと思う余裕もなく。

魅戸の卑猥な指先を振り払おうと、土方は腰を振って尻を跳ねさせた。

上半身は真選組幹部服を纏ったまま局部を露出し、拘束する鎖や縄を軋ませながらくねくねと踊る土方の姿はとても艶かしく卑猥で、老人たちを悦ばせた。

【1】

朝なんか嫌いだ。
朝なんていない。
闇の中で身を丸め。
土方は目覚めを拒絶する。
深い深い眠りにつくことだけが。
せめてもの救い……。

「ヒィアアッ！」

鋭い痛みと、自分の悲鳴で土方は跳ね起きた。

「おはよう、副長さん」

「ヒィウウウッ！」

再び、千切れそうなほど強く乳首を摘みあげられて、不意を突かれた土方は絶叫した。

六人の部下を従えて、角次郎はドスのきいた声で怒鳴った。

「おいおい、エサを持ってきてやった飼育係様に、挨拶も言えねえのか！？」

「…ハア、…ハア」

こんなことをされて言えるわけがないだろう！——と、呼吸を整えながら心の中で呟くと、

「なんだ、反抗的な態度とるじゃねえか。調教しなおさなきゃか？」

「！」

角次郎の後ろにいる部下が、にやにやしながら親指サイズの陶器の小瓶を土方に見せた。

それを見た瞬間、土方の血相が変わった。

その中身がどれほど恐ろしいものなのか、土方は身をもって知っているのだ。

「……し、失礼いたしました。おはようございます、角次郎様」

土方は布団から身を起こし、土下座で謝罪した。

角次郎というのは、初めて魅戸の屋敷に来た時に土方を舞台上げた男の一人で、屈強で粗野なゴロツキのような三十代半ばの男である。

今では、この男は土方の上に君臨する『飼育係』の一人だ。

「まったく、さっさとそれくらい言えよ、このバカ犬！ 脳味噌ねえんじゃねえか！？ バカ犬にはバカ犬らしく、これをつけてやる。こちに尻むけろ！」

「……はい」

土方の瞳の奥が怯えるように震えた。

ヴィーン、ヴィーン。

角次郎の手の中では、ふさふさな茶色の犬の尻尾がついた極太パイプが、不気味な唸り声を上げている。

「のろのろすんじゃねえよ！ 俺はパチンコに負けてイラ立ってんだよ！ これ以上俺を怒らせるんじゃねえ！」

そんな理由で、酷いことをされるなんて……。

土方は慌てて尻を向けながら、やり切れない思いをどうにか沈める。

機嫌の悪い時の角次郎は、めちゃくちゃだから……。

本当にあの小瓶を使われてしまうかもしれない……。

ジャラジャラという金属音を立てながら、土方は角次郎に尻を向けた。ジャラジャラという音は、土方の足首のあたりから奏でられる奴隷の音だ。土方の足首には鉄輪の足枷が嵌められていて、二十センチほどの短い鎖で繋がれている。この足枷が外されるのは、違う拘束具をつけられた時だけ。

「よし、刺すぞ」

「…っ」

土方のズボンが下ろされ、尻が露になる。

縮こまっている蕾に極太のパイプの先端が押しつけられて、土方は痛みを耐えるために目を閉じて俯いた。

その土方の尻の、覚悟していた場所より右にずれた所に激痛が走った。

「つぐあ！」

右の尻たぶに、電流の流れる短い鞭が振り下ろされたのだ。

「おい、目え閉じてんじゃねえよ！ 鏡を見ろ！ 副長さんが犬コロになるところを、その目ん玉ひんむいてしっかり見届けろ！」

「…は、はい」

直視するのが辛くて目を閉じたのに、そんなささいな拒絶すら許されなかった。土方が顔を上げた先には、大きな鏡がある。鏡の中には、四つん這いになり、ズボンを下げられ、尻穴に尻尾付きのパイプを押し当てられている真選組副長の姿があった。魅戸の屋敷での土方の普段着は、なんと真選組の幹部服だった。製造元から本物を取り寄せているという。魅戸の立場であれば、それくらい訳ないのだろう。自分が真選組副長であることを忘れさせないように、飼育係たちは土方のことを『副長さん』と呼んでからかっていた。真選組副長の立場と姿のまま土方を性奴隷として飼うことを、魅戸はとても楽しんでいるのだ。そんな土方の首には、鉄製の赤い首輪まで嵌められていた。首輪には、銀色のトゲと手綱を繋げるためのリングがついていて、反抗や逃亡防止のために、リモコン操作で電流が流れる仕組みになっている。魅戸の屋敷から逃亡をはかった瞬間、気絶するほどの電流が自動で流れる装置も取り付けられている。こ

の首輪には、取り外すための止め具は存在しない。魅戸の屋敷に連れて来られた日に、溶接で取り付けられたのだった。二度と取り外せぬ首輪の存在を意識する度、土方は押し寄せる被虐感に苦しうに顔を歪ませる。

「おら、挿すぞ！」

「…ぐっ」

何の前戯もなく、土方の直腸に極太パイプが唸り声を上げて攻め込んだ。尻穴を抉る異物感と痛みに、土方が苦悶の表情を浮かべた。痛いには痛いだが、毎日の調教の成果なのか、裂けることもなく尻穴はパイプを咥え込んだ。

「これでよし。犬コロの完成だ。——おい、犬コロのエサの準備をしろ」

「へいっ」

角次郎の後ろに控えていた数人の男たちは、布団を片付けると、にやにやしなから土方の腕を後ろ手に捻り上げて手錠をかけた。ペタンと、顔から胸にかけてが畳みに押し付けられた。その土方の鼻先に、朝飯の皿が並べられる。

「相変わらず豪華なお食事ですらやましいねえ。残さず全部食えよ」
後ろ手に拘束されているのだから、箸など使えるわけがない。

「……いただきます」

土方は、何かを諦めたような力ない目つきで、犬のように皿に直接口をつけて朝食を食べだした。パイプの弱い振動に尻を蹴られながら、顔を赤くして鮭に貪りつく。最低な格好をさせられているというのに、尻穴を蹴るパイプの刺激に勃起して揺らめいている証が惨めさを倍増させる。毎食、土方には魅戸と同様の豪華な食事が用意されているが、それを美味いと土方が感じることはなかった。人間らしい姿で、まともに飯を食べさせてもらえることがないからだ。まるで土の塊を食べさせられているようで苦しくて苦しくて仕方ないが、全て食べ終わるまで許されない。人間が生きるために不可欠な食事の時間は、土方の尊厳を奪い、性奴隷に堕ちたことを実感させる屈辱の時間として使われているのである。

「やっと食べ終わったかよ。まったく、本当にグズだねえ、副長さんは」

「……ぐはあっ！」

食べ終わったばかりの土方の腹を、角次郎は蹴り飛ばした。蹴られた衝撃で尻穴がパイプを強く咥えこみ、痛みと快感で土方が悲鳴を上げた。

「おらおら、飯の次は散歩だ。食っちゃ寝、食っちゃ寝してたら豚になっちゃうぞ」

「…うぐう！」

足枷をされ、後ろ手に縛られている土方を、角次郎は何発も蹴り飛ばして庭へと落とした。

土方が軟禁されている建物は、魅戸邸の庭にある離れである。

離れから出るとは禁じられているから、土方が外に出られるのは、余興のような虐待が庭で行われる時だけだ。

庭の砂利石の上で芋虫のように転がっている土方の手錠を、角次郎が外してやった。

「いつまでも寝てんじゃねえぞ。『散歩』って言ってんだろ、副長さん」

「うう…」

『散歩』と男たちが呼ぶ虐待は、日常的に行われているもの一つである。土方は地面に両手をつけて、四つん這いの姿勢をとった。

「よしよし、いい子だ、副長さん」

調教した通り四つん這いになった土方の頭を、角次郎がポンポンと叩いて褒めてやった。

土方の背中に、角次郎ともう一人の部下が跨った。

「さあ、楽しい散歩の始まりだけ、副長さん。離れのまわりを三周まわれ。途中でイッたら罰だ。わかってるな？」

「…はい」

「おい、テメーなに人間様の言葉しゃべってんだ！ 犬なんだから、『ワン』で答えるよ、バカ」

「あああああ！ …ワン！ ワン！ ワン！」

許しを乞うように土方が啼いた。四つん這いの姿勢を保つことが出来ず、肘も膝も曲がり地面に突っ伏した。土方の背に跨った角次郎が、パイプの振動を最強にしたのである。狭い直腸の中で、極太のパイプが土方の性感を責め立てた。

（ああ、…イッチまう！ 止めてくれよ！）

命令違反をして罰を与えられることも嫌だが、犬の姿でパイプに罅られ、喜んでいのかのように絶頂を迎える痴態を男たちに晒すことも嫌で仕方なかった。羞恥の極みである。

何度も何度もそんな醜態を暴かれたが、慣れることなどできなかった。

角次郎の後ろに跨った部下が、面白半分に、尻尾を掴んでぐりぐりと直腸を掻き混ぜた。

「おーい、副長さん、まだ一步も進んでねえのにそのチンポはなんだよ。気持ちよくておっ勃ちまったかあ？ おらおら、イケよ！ きっつーいお仕置きが待ってるぜ！」

「ひゃううう…！ ああ…、ワン！ ワン！ ワンシー！！」

ふるふると身を震わせて耐えたが、けたたましいモーター音を上げて振動するパイプは、どんな最低な状況下でも条件反射のように残酷に快感を生むシコリをしつこく蹂躪し、腰の中心の熱をどんどんと高めた。

（ああ…ヤバイ、イッチまう！ イヤだ！ イヤだ！ やめてくれ！）

土方は快感に蕩けた尻を振りながら堪えようと頑張ったが、浅ましい身体は快感を拾い悶え続け、反り返った性器が腹を叩いてさら